

文苑

漢詩

文科一部二年 安永三千

●苦熱

炎風三伏日 茅舍火雲天 一枕林中臥
清陰急暮蟬

●午睡

竹亭移枕簟 簾外臥松風 日暮酣眠足
覺來氣白雄

●江亭避暑

垂楊江水畔 鷗鷺浴清流 綺席開襟坐
南薰百尺樓

隊の記念祭あり昔は、赤土多き坂道をのぼりく
だりすることの難かりしかど此の頃は白き石段
築かれて詣づる人も多くなりたれど花めづる方
多くなりぬ。

磐梯の朝景色眺めてはその日の空模様ばかり
知りて桑摘む手早やめしを云はれし養蠶業も次
第に衰へ行きて桑畑はきり開かれむね／＼しき
家たち並び舊城の東よりは清朗なる嗽吠の音朝
夕に會津の天地を響かすに至れり。
會津の夏は山國とて暑さ烈しからず三伏の一日
に瀧澤峠を越え行きて猪苗代湖に遊ばんか湖畔
には眼を驚かす樓屋はあらねども山を背にする
茶店三四軒あり、日毎に客も訪れねば湖上に舟
を浮べて魚など漁して生計を營み居るなりされ
ど湖邊は遊ぶがまゝ、浮かぶが儘にまかすなり。
曉早く朝霧湖面を覆ひて湖面依稀としてはてし
なく霧の底ひに緑水ほのかに見ゆる時海知らぬ
山の子等のはるかに渺茫たる海原に擬へて海戀
ふる心を慰めしことをも幾度ぞ。かくて日いよ
／＼高く上りて都會にてはまさに暑さに心倦み

國文

●我が故郷

文科一部二年 佐藤ヤス

都を北に白河の關を越え行きて越し路にさし
かゝる處にその昔四道將軍の二人なる大彦命と
武淳川別命との會合せられし所とて今尙その名
を稱する會津といふ所あり。これ我が故郷なり。
明治の半頃火を噴きて峯の半を削りたる磐梯山
は巋然として群山中に聳え裾野に周圍十六里な
る猪苗代湖を擁して自らこの地の關門をなせり
中央なる都會を若松と云ひてその東南の蒲生氏
の築きし鶴ヶ城址は昔を語る影とては浮き草
漂ふ濠の水と苔むす石垣とのみなり。市の東北
の飯盛山の櫻爛漫たる頃はひに御花祭とて白虎

はて、文讀むわざも怠りがちなる日盛りに淺瀬
の岩に腰うちかけて此の地の名産なるまくわ瓜
を食うべつ、湖面を渡る涼風に髪撫でしむる心
地よさげに夏こそよけれと思ふなり。されど豊
かなるはこの地の秋なり。會津平野に金波うち
よする頃には柿赤く栗實り山には松茸しめじ初
茸などあさるがまゝに生ひ出づるなり殊に多き
は飯盛山のつづきにてその東北の山々は秋に至
れば山留めをなして自由に登ることを禁じ山上
に小屋ありて葦を商ふなり、商家にては毎年こ
の期に至れば子弟うち連れて此等の山に登り松
樹の下に石など集めて竈をつくりうちつごひて
炊ぎ食ふるをこよなき樂みとなすなり。かくて
會津の空には寒氣の來ることいと早し、鮭食ぶ
る習ひなる惠比須講の頃ははや磐梯の頂きは白
う雪の冠を被るなり、家々にては庭木軒先きな
ごの雪圍ひに忙しく雪交りなる磐梯おろしは日
毎に強うなりゆきていと耐へ難きはこゝ十數日
の間なり。いよ／＼雪降りそめて野も山も家も
庭も深ううづもれ藁靴はきて歩く頃に至れば何